

第四節 動物

環境

熊野町の周囲には、西側に絵下山、金ヶ燈籠山など、標高約五〇〇メートルから六〇〇メートル近い山々があり、北側には、城山、洞所山、原山、鉾取山など、標高約六〇〇メートルから七〇〇メートルの山々があり、東側には、小田山、石岳山など、標高五〇〇余メートルから七〇〇余メートルの山々があるが、南側の山々は、三石山などの標高四〇〇余メートルの比較的低い山々によってかこまれている。これらの山々のうち、西側にある山々の西麓は海岸に接しているが、北および東側の山々は、隣接する東広島市の山々に続いている。また、東および南側の山々は、呉市の灰ヶ峰、江ノ藤山、土山など標高約六〇〇メートルから七〇〇余メートルの山々に続いている。このため、往時、森林に生息する動物は、隣接する市町村の山々に生息する動物との間に交流があったと考えられ、比較的多くの動物が生息していたものと思われる。しかし、現在では、北側の山々の北麓には山陽本線および国道二号線が通り、東側では、東広島市や賀茂郡黒瀬町の開発が進み、南側は、呉市の開発のため呉市苗代町、焼山町など住宅団地が造られ、それに通ずる道路も整備されるなど、熊野町周囲の山々は、動物交流の面では、周辺市町村の山々から孤立した状態に近くなっていると思われる。それに加えて森林の伐採や植林もあり、熊野町における森林動物の生息環境は悪化してきたといえよう。

熊野町の河川には、二河川水系と瀬野川水系の二水系がある。

二河川はその源を広島県呉市苗代町付近に発し、ほぼ北に流路をとり安芸郡熊野町呉地で呉地川を合流し、さ

らに、久保地で道上川、石風呂川を合流し西南西に流路をかえる。その後、呉市押込町で平谷川を合流し南に流路をかえ、本庄貯水池を通過して南に流下し、二河峽を経て呉港に注いでいる。河口から源流までの流路延長は約一九キロである。

一方、瀬野川水系の主要支流である熊野川は、その源を熊野町城之堀付近に発し、ほぼ北東に流下しつつ前地付近で三谷川、下深原で深原川、宮前で雲母川を合流し、広島市安芸区阿戸町国草付近で北に流路をかえ、安芸区瀬野川町一貫田付近で瀬野川と合流する。瀬野川は西に、山陽本線に沿って流下し、安芸郡海田町で広島湾の一部である海田湾に流入する。河口から源流までの流路延長は約二八キロである。

哺乳類

森林を中心として生活する哺乳類は、イノシシ、ノウサギ、サル、タヌキ、キツネなどがあるというが、イノシシは、一年に一人が三頭以上捕獲する人もあるということであり、比較的多く生息しているようである。サルは約六〇個体の群れが生息しているという。タヌキやキツネの個体数は少ないものと思われる。しかし、小型哺乳類のモグラ、ネズミ類は、種類の確認はできなかったが、かなりの量生息しているものと思われる。このほかの哺乳類では、イタチ、コウモリなどが生息しているが、イタチはチョウセンイタチが多くホンドリタチはほとんどみられなくなったという。コウモリの種類については十分に確認することができなかった。また、熊野町の山にはみられないが、隣接する広島市安芸区阿戸町の山にはシカが生息しており、近年増加の傾向にあるという。

鳥類

野や山では、ハシブトガラス、ハシボソガラス、カケス、ムクドリ、スズメ、ホオジロ、ヒバリ、セグロセキレイ、メジロ、モズ、ヒヨドリ、ウグイス、トラツグミ、ジョウビタキ、ツバメ、ハヤブサ、トビ、キジバト、ヤマドリ、キジなどがよくみられる。キジは放鳥されたものようであり、在来のキジはみられ

なくなつたということである。

は虫類

アオダイショウ、シマヘビ、シマヘビの黒化型（カラスヘビ）、マムシ、などがみられ、そのほか、ヤマカガシ、ジムグリ、ヒバカリなども生息しているものと思われる。カナヘビ、トカゲ、イシガメ、クサガメもみられた。

両生類

田圃に、トノサマガエル、ヌマガエルがみられ、山に近い田圃や用水路にツチガエルがみられた。また、低い山地でニホンヒキガエルがみられたが、個体数は極めて少ない。谷川にはタゴガエルがみられた。そのほか、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、ウシガエル、イモリがみられた。ウシガエルは戦後移入されたものと思われる。比較的めずらしい蛙として出来庭付近にシュレーゲルアオガエルが生息し、田圃の用水路の岸などに泡状の卵塊を産み付けているという。この蛙は、中国山地に近い地域には生息するが、海岸に近い地域ではあまりみられておらない。熊野町に近いところでは、これまで東広島市八本松町飯田中組北付近の山中、および宮島でみられたことがある。このような意味で、熊野町にシュレーゲルアオガエルが生息することは分布上貴重な蛙であるといえよう。

魚類

魚類の調査は、二河川水系では、熊野町境界の呉市押込町（河口から約一キロメートル）から上流に、支流を含めて四〇地点について、瀬野川水系では、熊野川の海上側（瀬野川河口から約二キロメートル）から上流に、支流を含めて三六地点、計七六地点について行った。

調査の方法は、手網によって魚類を取り、種類を確認しながら、潜水によって各種類の個体数を数えた。

調査の結果は、表1—4—1および表1—4—2に示したように、熊野町には、両水系あわせて一二種類の魚類がみられた。このうち、二河川水系に九種類、熊野川水系に九種類が生息し、両水系ともに生息している魚は

タカハヤ、カワムツ、オイカワ、ドジョウ、シマドジョウ、ドンコの六種類であった。二河川水系だけにみられたものはモツゴ、ブルーギル、ヨシノボリの三種類であり、また熊野川水系だけにみられたものはムギツク、アカザ、カワヨシノボリの三種類であった。

これらの魚類の生息状況をみると次のようであった。

ムギツク

熊野町では、海上側の熊野川本流の一点だけにみられた。生息場所は、川幅約六メートル、水深一・五メートルの砂底の淵であり、川底の一部には三〇〜五〇センチ大の礫が二重から三重に重なっていた。この魚は、この礫が重なっているところにかたまっていた。

ムギツクは、口が小さく、口ひげがあり、目の前から尾びれの基部まで体側に濃い黒い線がある魚で、河川の中流域に多くみられる種類であり、瀬野川水系では、熊野川の海上側から下流瀬野駅付近までによくみられる種類である。広島県の河川では、二河川のように生息していない河川もあり、佐伯郡の小瀬川のように、大きな河川でも、現在は移入されて生息しているが、昔は生息していなかったという河川もある。

モツゴ

熊野町ではクチボソといい、口が小さく、ムギツクによく似ているが、ムギツクのような口ひげはなく、吻端から体側にかけての濃い黒い線もみられず、鱗が大きいので区別される。

この魚は本庄貯水池および押込町、川角、久保地、重地、山代付近の二河川水系だけに、淵や水深の浅い砂底の場所にみられた。

この魚は、河川の下流域に主に生息する種類であり、昔から熊野町に生息していたものでなく、何かの機会に移入され、二河川の現在の生息地や、本庄貯水池のようなところにすみついたものと思われる。本庄貯水池に多くみられることから、この貯水池で繁殖し、河川に遡上しているとも考えられる。

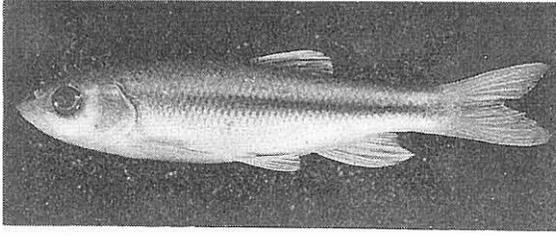


図1-4-1 カワムツ (中国新聞社刊、広島県大百科辞典より)

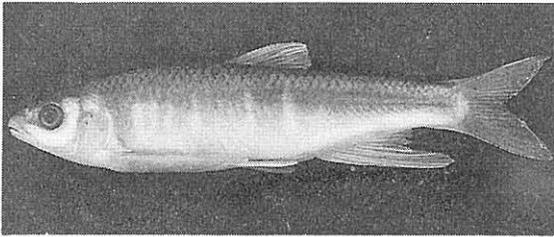


図1-4-2 オイカワ (中国新聞社刊、広島県大百科辞典より)

タカハヤ

熊野町ではドロバエとよんでいる。比較的冷水に生息する魚で、両水系とも支流だけにみられ、水量の少ないよどみや渚の周辺部に多くみられた。カワムツと混生している場所もあった。

カワムツ

熊野町では、アカモチ、アカンバチとよび、赤色の婚姻色が出たものはグリともよぶ。子供たちが釣って来て、よく井戸に入れていたという。

この魚は、両水系とも、生息個体数が最も多い種類である。ほとんどの調査地点に生息しており、支流より本流に多くみられた。瀬より渚状部に多く、階段的に落ちこむような河床の部分で多くみられた。

オイカワ

この魚の名は、琵琶湖付近の方言が和名になったといわれているが、熊野町

では、ヤナギ、ヤナギバイとよんでいる。しかし、この名はカワムツの雌と混同してつけられているように思われる。二河川では呉地付近から下流に、道上川では重地付近から下流に、平谷川では平谷付近から下流にみられた。また、熊野川では加良地付近から下流にみられた。

カワムツは上流域まで生息するが、オイカワは、下流域から中流域の、日当たりのよい浅い瀬に多く生息する性質の種類であり、熊野町でも、上流域ではカワムツは生息していても、オイカワはみられな

かった。しかし、この魚は、河川改修などに伴って、近年増加しているように思われた。

ドジョウ

川角と上深原で一個体ずつみられただけである。両水系とも、河床はほとんど砂や礫からなっており、ドジョウの生息には適さない。みられた二個体も水田や用水路、池など泥底の場所に生息していたものが流出していたものと思われる。

シマドジョウ

二河川の呉地、苗代町で三個体、熊野川の宮前で一個体みられただけであり、生息個体数は少ない。生息場所はいずれも砂底の場所であった。

アカザ

熊野町ではテンキリとよばれている。昭和三十一年、五十八年に三谷川で見られているが、生息個体数は少なく、絶滅の可能性がある。清流に生息する魚であり、広島県でも、また全国的にも絶滅の一端を辿っている魚である。

ブルーギル

二河川の川角付近の二地点で昭和五十九年にみられたが、二河川では五十八年にはみられなかった。これらの生息地では、比較的水深の深い洩状部や、川岸の水草の中に隠れて生息していることが多かった。

この魚は、本庄貯水池に多く生息しているので、貯水池から遡上したものと思われる。

貯水池への移入経路は明らかでないが、昭和五十年前後に移入されたものと考えられ、また、幼魚も生息していることから、貯水池で繁殖しているものと思われる。

北米原産の魚で、日本には昭和三十五年に移入され、伊豆半島の湖に放流されたが、繁殖力が大きく、現在は各地の湖や池にみられるようになった。魚の卵や小魚などもたべるので、本庄貯水池および付近の魚相が変わる可能性も考えられる。

ドンコ

熊野町ではボンゴ、ゴンボなどとよばれている。個体数は少ないが、両水系ともほぼ全域に生息している。ほとんど止水に近い川岸の水草の中や泥の上で多くみられた。

ヨシノボリ

熊野町ではゴリン、ゴリなどとよばれているが、ハゼの仲間である。ヨシノボリは、その体色は人紋型によって数型に分けられている。熊野町にはこれらのうち、ルリ型、黒色大型、橙色型の三型がみられた。

ルリ型は、頭の頬部や体側に、まことに美しいり色の小点が散在するもので、この小点は雌雄ともみられるが、特に繁殖期の雄に顕著にみられる。

熊野川には生息しないが、二河川の呉地付近の瀬に多く生息し、昭和五十年前後には一平方メートル当たり約一個体以上みられたが、今回の調査では約一〇分の一以下に減少していた。しかし、広島県では、佐伯郡小瀬川に生息しているが、極めて個体数が少なく、熊野川のように高密度に生息している河川は、中国地方ではこれまでに例をみない。

黒色大型は、頭の頬部にははん紋がなく、胸びれ基部に黒色菱形の明瞭なはん紋があるもので、熊野川には生息しないが、昭和五十年前後には、二河川の呉地付近に生息しており、一平方メートル当たり約〇・三個体がみられた。今回の調査では、ルリ型とおなじようかなり減少していた。

橙色型は、頬部にはん紋がなく、黒色大型に似ているが、胸びれ基部の黒色菱形はん紋が不明瞭で、尾びれ基部が橙色になるものであり、熊野川には生息しないが、二河川では呉市苗代町の熊野川境界付近から下流に、また、各支流ではかなり上流まで、多くの個体がみられた。この魚は、昭和五十年には、少なくとも呉地付近には一個体もみられなかったものであり近年増殖したものと思われる。広島県では、東広島市の黒瀬川には以前から

みられたが、他の河川ではみられなかったものであり、全国的にも、琵琶湖など限られた場所に生息していたものである。しかし、近年広島県ではアユが放流される河川には、これまでヨシノボリが生息していなかった場所にまでみられるようになってきた。瀬野川水系でも、昭和三十年頃にはみられなかったが、近年広島市安芸区瀬野川町の瀬野から下流にはみられるようになってきた。

熊野町の二河川では、ブルーギルとおなじように、本庄貯水池に多く生息し、この付近の二河川では、川角の一点で、昭和五十九年に、幼魚が一〇平方メートル当たり約五〇〇個体、全部では一万個体を越える幼魚がみられたりするなど、橙色型の幼魚が非常に多くみられることから、この魚は何かの機会に貯水池に移入され、増殖して河川に遡上しているものとおもわれる。

二河川では、橙色型の増加につれてルリ型や黒色大型が減少していると思われる。

熊野町ではヨシノボリとおなじように、ゴリン、ゴリなどとよばれている。ヨシノボリに極めてよく似ているが違うところは、胸びれのひれ条数が一八本以下であり、卵の大きさがヨ

シノボリの約三倍ある。また、体の横じまがヨシノボリより不明瞭である。熊野川では支流を含めてほとんど全域に比較的多く生息しているが、二河川水系ではこれまで一個体もみられておらない。

熊野川にはヨシノボリが生息しないでカワヨシノボリが生息しているのに対し、二河川にはヨシノボリが生息しカワヨシノボリが生息しない。おなじように、ムギツクは、熊野川にはみられるが二河川にはみられない。また、このたびは両河川とも確認されなかったが、ウナギとナマズが熊野川には生息するが二河川には生息しないという。近年移入された魚は別として、おなじ町内の極めて接近している両河川で、在来の魚にこのような分布の違いがみられることは、その原因は不明であるが大変興味ふかいことである。

魚類の調査については、山口県豊北高等学校教諭河口郁史氏によるところ大であり、末尾ではあるが記して深甚の謝意を表する次第である。